兵庫生物　**14**（2）：123－128，2011

秘境アルバニアを旅して
―還りつつある自然―

大賀　二郎

I travels around Albania
Is it development or a natural recurrence?

Jiro OOGA

はじめに

ヨーロッパ最後の秘境と云われるアルバニアは，長年，鎖国状態にあったが，2009年ＥＵに加盟してから，やっと開国の道を歩み始めた。戦乱と経済破綻によってインフラは麻痺し，集団農地は放棄され，最近の経済指数は世界最悪といわれる。このような状況下，同国を訪れた。2010年４月，10日間の日程であった。山間部には残雪があった。隣国マケドニアから入国した。

社会も経済も危機的な状態と思われていたが，意外にも平穏が保たれていた。落ちるところまで落ちると，もう失うものがない。貧富の差もなくなる。もともと地産地消の農業国で，食べることには事欠かない。宗教はイスラーム，アルバニア正教，ローマカトリックなど多様であるが，争いはないようだ。共産党政権下では無神論国家が出現した時代もあった。しかし，国民は伝統的に信心厚く共助精神がある。お祭りが好きで，楽天的である。（写真１）。

アルバニアの経済は麻痺状態にあるといわれているが，この国にはゆたかな大自然があった。山岳，原野，渓谷，湖沼などが展開する自然遺産がある。そして，もうひとつ，古代ギリシャ，オスマン，ローマ時代に遡る長大な歴史遺産がある。文化は自然のなかで呼吸している。

これらのことに関心をもって，旅を続けた。注目したのは自然への再生の歩みと，次の地域の圧倒的な自然景観であった。

テイラナ丘陵域

（還ってきた野生植物）

テイラナ市は，アルバニアの首都であり，国のほぼ中央に位置する。周辺は山岳があり渓流があり，自然にも恵まれている（写真２）。近郊にはクルヤ城やアポロニア遺跡がある。このあたりは，古代から数々の文明の交流や大国の侵略があった。外来植物が固有種ように定着している（写真３）。多肉植物の群落があったりして，それなりの景観をなしている。

図１　アルバニアの周辺

近世においても列強に支配されることが多かった。しばらくナチスドイツの影響下にあり，その崩壊後は，社会主義政権が続く。国土防衛の方針から要衝にトーチカが建設された（写真４）。また食料自給から集団農業が進められた。山国で山間部も開墾された。屈曲・段差の多い段々畑は，労多く効率が少ない。その政権が崩壊すると同時に放棄された。特にテイラナ丘陵域は戦時体制化の下で荒廃していた。

今はほぼ全域が原野に還った。野の花が咲き乱れ，反って素晴らしい景観をなしている（写真５，６）樹齢千年に及ぶオリーブや葡萄の老樹はそのまま立っていて，この国の歴史の深さを物語っている。真っ先に還ってきた野生植物は，つぎの種が観察された。

Onopordum acanthium L.　　キク科
Geranium molle L.　　フウロソウ科

森羅万象の館　博物館学芸員
2010年12月10日受理

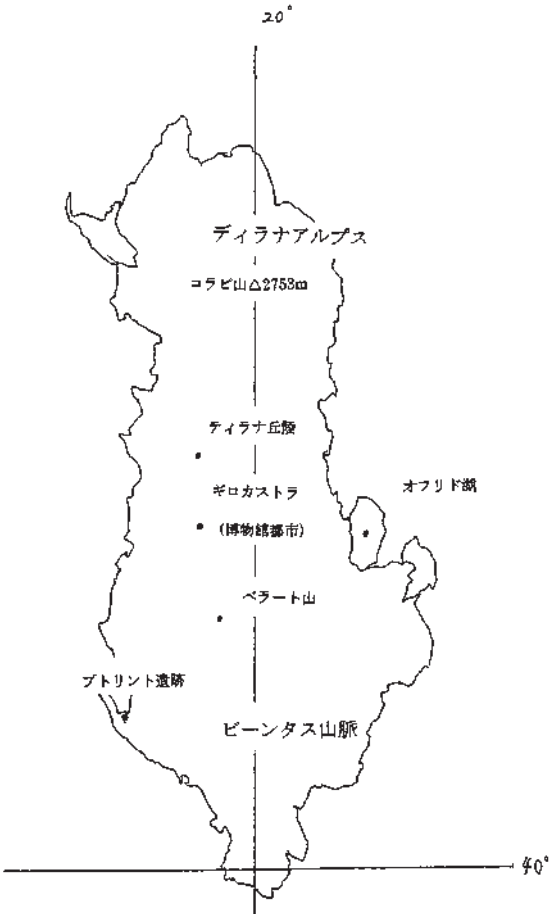

図２　アルバニアの調査地点

Heracleum sphondylium L.	セリ科
Foeniculum vnlgare Gaertn.	セリ科
Euphorbia epithymoides L.	トウダイグサ科.
Iris foetidissima L.	アヤメ科
Arum maculatum L.	サトイモ科

（写真 7）。

つぎにかっては園芸植物であったが，野生に還ったものがある。余分な贅肉は落としていた（写真 8）。自然の復元力の強さに目を見張った。つぎの種が観察された。球根，宿根植物に多い。

Lavatera trimestris L.	アオイ科
Scilla siberica Ander.	ユリ科
Ornithogalum umbellatum L.	ユリ科
Narcissus jonquilla L.	ヒガンバナ科
Cyclamen coum Mill.	サクラソウ科

ギロカストラ

（ジャングル都市）

峡谷に聳え立つ城塞。迷路のような石畳。そこに発達した都市。石造りの住居, 種々雑多な街並み, バザール，モスクなどが今も呼吸している。オスマントルコ時代から現存し，博物館都市ともいわれ，世界遺産に指定されている（写真 9）。植物は到る所繁茂している。高所にあって，大気が流れ，適当な湿気があり，日照も適当にある。それぞれの環境に棲み分けている。ここで勢力があるのは，ジャノメソウ，ユーホルビアなどトウダイグサ科である（写真 10）。特に石崖には巨大化したものがあった。古い屋根などにはいろいろな種類のマンネングサ *Sedum* 属がみられた。渓谷や城郭の窪地にはシダの群落があった。特異なものとして，岩石の裂け目などに生育する小型のシダがあった。葉が多肉化しているので，乾燥に耐え，また他の植物が容易に入り込めない場所にあった（写真 11）学名不詳。なおこのような辺境の地にも戦乱の影響が及んでいた。城山の中腹に近年に掘られた地下道があった。

山砲，高射砲，小型戦車 , それにどうしたことか破壊されたジェット機が持ち込まれていた。計器の中まで蔦が入り込んでいた。

ブトリント遺跡

（バルカンのアンコール遺跡）

アルバニア最南端に古代ギリシャ時代に建設された遺跡がある。イオニア式神殿，円形劇場，公衆浴場などがある（写真 12）。神殿には泉があり，今もこんこんと湧いており（写真 13），引き水が運河のように通じている。1992 年世界遺産指定によって調査が始められている。しかし，今も泥と潅木によって埋没した状態にある。石組の間からは，高木が立ち上がっている（写真 14）。周辺の樹林帯は，雑草とそれに湿地で立ち入りできない。陽が差込めない場所もある。

草本ではウイキョウ，ウマゴヤシ，オオバコなどごく普通の雑草が茂っていた。ここで珍しい植物として，遺跡の石の亀裂にギョクハイ *Umbilicus rupestris (Salisb.) Dandy* Mill. と呼ぶ奇妙な植物があった。葉は円形の多肉質，成長は緩慢なようで，枝を上へ上へと伸ばしていく。土のない遺跡の石に適応したベンケイソウ科の種である（写真 15）。水中には緑藻類やヒルムシロ , オモダカが見られた。魚影はなかったが，何かいそうな感じがした。蛙の鳴声が聞かれた。静寂が立ち込めていた。今後の調査が待たれる。

ベラート山

（アドリア海岸の原生林）

海抜 2500m 前後アルバニアでは最高所である（写真 16）。セイヨウネズ，セイヨウイチイ，オオシュウクロマツ，ドイツトウヒ，モミ，バルカンシロマツなどの原生林があり，マツ類には樹齢千年を越えるものがあるという（写真 17）。山頂付近は風通しがよく，高山植物帯になる（写真 18）。

動物ではバルカン山脈にかけてヒグマ，オオカミ，アナグマ，ヨーロッパヤマネコなどの記録がある。

オフリド湖

（ヨーロッパのバイカル湖）

アルバニアとマケドニアの国境に位置する。バイカル湖と並ぶ古代湖である。他に透明度や生物相など何かにつけて比較される。魚類はブラウントラウトが一般的に食用にされている。巻き貝, タンスイカイメン , 環形動物などに固有種がいる。タンスイカイメンがいるのは , バイカル湖とここだけだが , 同種かどうかはわからない。前夜が嵐だったので , 岸辺に打ち上げられているのを見た（写真 19)。この湖はマケドニアから訪れるのが便利であり，私たちは，湖畔の町に 2 日滞在した。ギリシャ教会のある風光明媚なところである（写真 20)。また湖畔の売店で，参考品としてヨーロッパオオカミの剥製が置かれていた（写真 21)。身近なところに今も野生が残っている感じがした。

おわりに

アルバニアは今岐路に立っている。戦乱と経済の失政そして鎖国。今再生の道を歩み始めたところである。石油などの鉱物資源が豊富であるが（写真 22)，現時点の開発投資には多分のリスクを伴う。

この国には，恵まれた大自然，清冽な大気と水（写真 23)，長大な歴史遺産そして自給できる食資源がある。物量の国にならなくとも，自然と共存する心ゆたかな国として歩むことができる。

開発か自然回帰か。それは競争社会から共存社会へ。自然との共存が思想の原点にある。アルバニアは岐路に立っている。世界が直面する課題でもある。

わたしたちの行動の一部はアルバニア放送で放映された（写真 24)。

写真１　明るい子供たち

写真４　戦時の遺物トーチカ

写真２　山麓のティラナ市

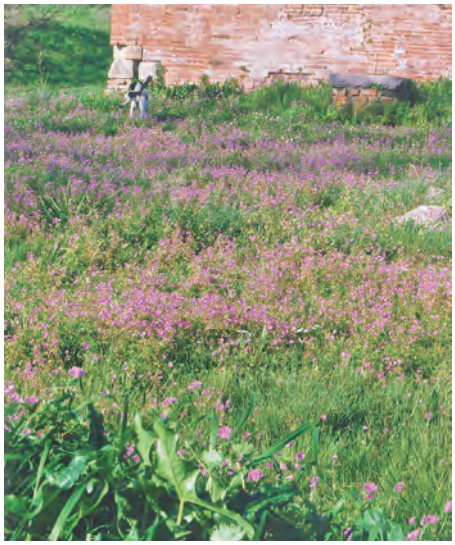

写真５　開拓地に還ってきた野生植物

写真7　各地で勢力を増すアラム

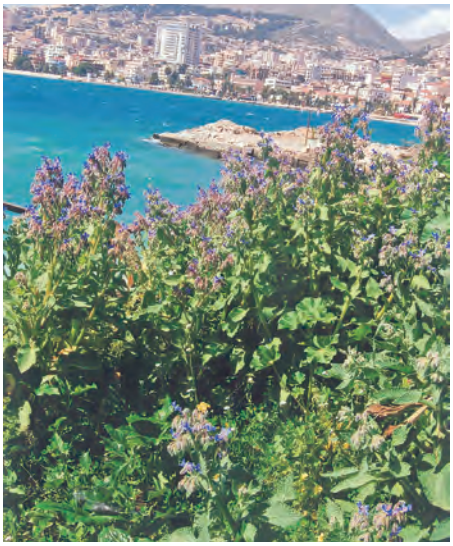

写真３　外来植物が広がる国内

写真６　英国ガーデンのような野生植物

写真8　還ってきた園芸植物

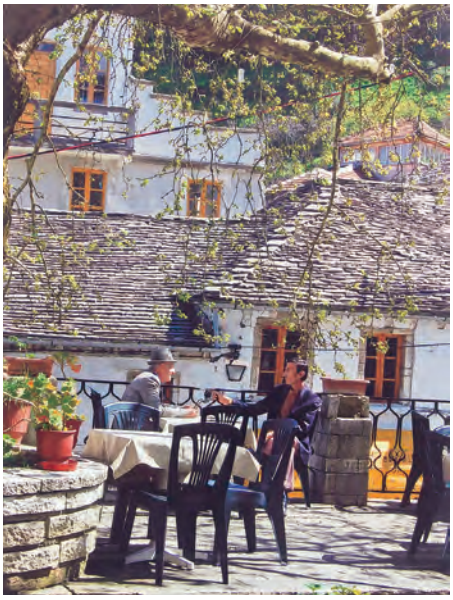

写真9 ギロカストラでの優雅な生活

写真10 石壁に適応するトウダイグサ科

写真11 石の亀裂に根を張る多肉質のシダ

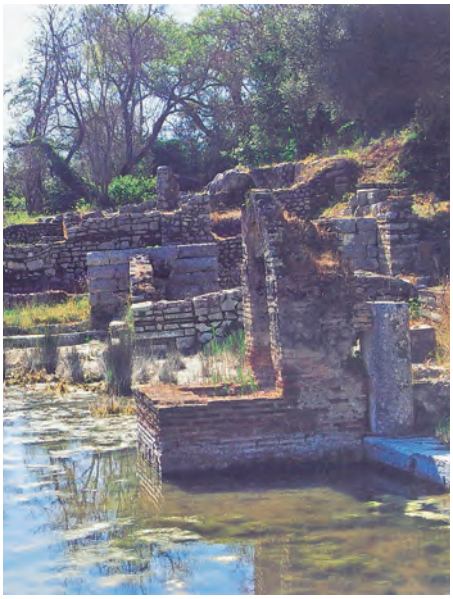

写真13 水辺の遺跡

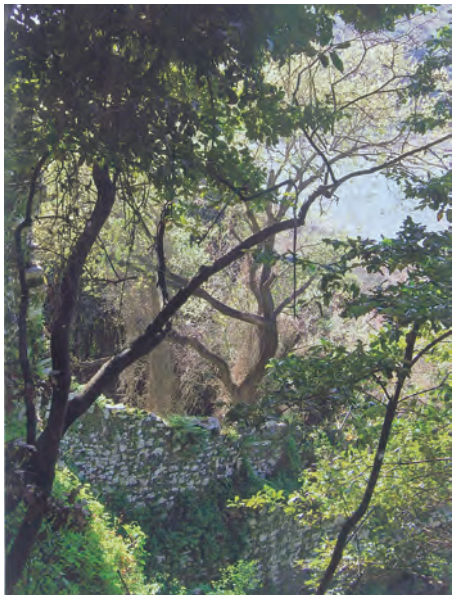

写真14 高木に侵される遺跡

写真15 登攀植物ギョクハイ

写真12 樹木を取り払ったブトリント遺跡の一部

写真16 ベラート市とベラート山

写真17　ベラート山頂の林相

写真21　参考品ヨーロッパオオカミの剥製

写真18　山頂の高山植物地帯

写真22　老朽化した石油掘削設備

写真19　打ち上げられたタンスイカイメンの断片

写真23　岩山から絶えることなく湧き出る湧水

写真20　オフリド湖の景観（マケドニア側から）

写真24　アルバニア放送のメンバーと